

天橋立 ～宮津市府中の賑わい～

日本三景のひとつである天橋立の北側付けね部分に、宮津市府中ふちゅうがあります。「府中」という地名は国府がこの地に存在したことをうかがわせる地名で、宮津市教育委員会が発掘調査をおこなった中野遺跡なかのでは、奈良時代の軒平瓦・硯・墨書土器など一般集落では出土しない遺物が見つかっています。



丹後国府推定地と天橋立

この地には、元慶元（877）年に丹後国内最高の位階を得て、「丹後国一の宮」として知られる籠神社このがあります。平安貴族や中世武士が数多くこの地を訪れたようです。

府中地区の中世の賑わいを彷彿させるものとして、雪舟が1501年から1506年の間に描いたと言われる『天橋立図』があります。この絵は、南東から北西方向に天橋立と阿蘇海を鳥瞰したもので、



雪舟が描いた『天橋立図』（京都国立博物館提供）

画面の中段、ほぼ水平に天の橋立が描かれ、右手奥に成相寺、その麓に丹後一の宮で籠神社、中央左方である天橋立の東側には智恩寺が描かれています。府中地区の狭い平野には

海岸に沿って家々が密集しており、その間に街道と松並木が描かれています。

近年、雪舟の『天橋立図』に描かれた情景を彷彿とさせる発掘調査の成果がありました。

籠神社の東、真名井川なんばのの東側にある難波野遺跡で発掘調査を実施したところ、

平安時代後期から鎌倉時代の井戸のほか、壁や屋根は残っていませんでしたが建物の柱の根元がそのまま残った状態で見つかりました。柱を埋めた土砂の観察から、真名井川の土石流によって一気に建物が崩壊したものと推測されます。建物の周辺からは一般集落ではほとんど出土しない高級食器類である輸入陶磁器や漆絵漆器類、貴族の遊具である独こま楽、多量の箸、下駄などが出土しています。都から貴族・将軍・武家を招き、宴会をした様子を彷彿させます。

また、現在の道路を拡幅するために、籠神社の鳥居を移転することになり、移転後にそれまであった鳥居の下を調査したところ、直径0.8mと0.9mの木柱の残欠が2か所で見つかりました。出土した遺物から鎌倉時代頃の古い段階の鳥居と推定されています。そのほかにも、16世紀中頃の溝や数条の柵列、溝の南側では地面が固く締まった道路面と、多量の松まつまり毬を含む植物遺体などが見つかりました。

これらの考古資料は200年前後の時間幅があり、厳密には雪舟の『天橋立図』に描かれた情景とは異なりますが、籠神社を中心にして、中世の丹後国府中の賑わいをうかがわせるものです。

(石尾政信)



丹後一の宮である籠神社